

推薦のことば

中心静脈路の確保は、さまざまな病態に対する必須の診療手技となって半世紀近くが経ちますが、重篤な合併症を伴う「危険手技」の代表として、標準手順の改善や教育技法の工夫を含め、その安全な実施のために多くの努力が重ねられてきました。

その最先端の成果の1つが、超音波ガイド下で挿入されるPICC（末梢挿入型中心静脈カテーテル）です。この手技は、現在、多くの臨床現場で注目されているとはいえ、誤解も多く、また米国では、すでにPICCの濫用が指摘されています（Choosing Wiselyキャンペーン、本書p19参照）。今回、この領域の第一人者である徳嶺讓芳先生の監修、金井理一郎先生の編集により、『必ずうまくいく！PICC』が刊行されました。

徳嶺讓芳先生は、一般社団法人「医療安全全国共同行動」の『行動目標3b：危険手技の安全な実施－中心静脈カテーテル穿刺挿入手技に関する安全指針の順守』を担当する技術支援部会のリーダーとして、長年、この問題に取り組んでこられました。本書は、先生の深い見識と豊富な実践体験に裏打ちされ、単なる技術解説書の域を超えて、中心静脈路確保の歴史を俯瞰し医療安全の観点から安易な実施を戒める教訓に満ちた教則本となっています。

鎖骨下静脈穿刺法が集中治療や静脈栄養の領域で急速に普及した1970年代、多くの若い医師は、気胸や動脈損傷、空気塞栓のリスクを知ったうえで手技の習得に情熱を燃やしました。シミュレーション技術が未発達でシステムとしての医療安全についての意識も低かった当時、合併症の発生は少なくありませんでした。私自身、気胸に対する胸腔ドレーンの挿入を手伝ったことは何度もありますし、勿論、気胸を作ってしまったこともあります。また、友人から以下のようなエピソードを耳にしたこともあります。無事、鎖骨下静脈穿刺でカテーテルを挿入した翌朝未明、血圧が下がるなど患者さんの循環動態が急に不安定になり、関係者一同、何が起こったか分からず右往左往していた、そのとき、一人が心タンポナーデのことに思い至り、すみやかに処置をして事なきを得た…というのですが、この話を聴いて、“何が起こりうるかをあらかじめ知っていること”と“そのとき、何をすればよいか分かっていて”の重要性を互いに確認しあったものです。この考えは、医療安全共同行動の『行動目標6：急変時の迅速対応』に活かされています。

現場の臨床医の皆様には、早くスキルを身に付けたい、との思いもあるでしょうが、患者さんの安全のためにはしっかりとした予備知識を身に付けてから事に臨むべき、との観点に立てば、本書は、まさに手技の実施に先立って熟読すべき必携の書と言えるでしょう。

2017年10月

一般社団法人医療安全全国共同行動 専務理事
小泉俊三